

令和4年度・5年度 台東区立図書館意見交換会 意見のまとめ

## 「台東区立中央図書館の機能強化について」

令和6年3月

台東区立中央図書館

## 目 次

I	はじめに .....	2
II	台東区立中央図書館の課題と機能改善のコンセプトについて .....	3
III	台東区立中央図書館の機能強化に係るご意見.....	4
1	明るく開放的な図書館 .....	4
(1)	空間について .....	4
(2)	書架について .....	4
2	誰もが利用しやすい図書館 .....	7
(1)	カウンターについて .....	7
(2)	レファレンスについて .....	8
(3)	読書バリアフリーについて .....	10
(4)	ICT 環境の充実について .....	11
3	交流できる図書館.....	12
(1)	「こどもとしょしつ」について .....	12
(2)	(仮称) アクティブラーニングルームについて .....	14
(3)	(仮称) ワークショップルームについて .....	19
IV	今後求められる図書館運営 .....	20
(1)	利用者協働の取組み .....	20
(2)	図書館DXの取組み .....	21
	参考資料 .....	26
1	審議経過 .....	26
2	令和4年度・5年度台東区立図書館に関する意見交換会委員名簿 .....	27

# I はじめに

台東区立中央図書館は開設から20年以上が経過し、その間に図書館を取り巻く環境が大きく変化しました。

近年、デジタル技術の急速な進展に伴い、各図書館ではICT技術を活用したサービスの向上や業務の効率化に関する取組みが進められております。

また、令和元年に施行された「読書バリアフリー法」により、障害の有無に関わらず、誰もが本や情報にアクセスできる読書環境の整備がますます重要とされています。

さらに、区民ニーズの多様化に伴い、図書館は資料の保管・貸出だけでなく、コミュニティスペースとしての役割も拡大し、話し合いのできる場の提供やイベント・講座の実施など、積極的な活動が期待されています。

これからの図書館は、知識や情報を集積する「知の宝庫」に加え、障害の有無を問わず様々な人々が集い、学び、本を通じた対話を通して創造し、課題を解決する場として機能する必要があります。同時に、今後ますます進化するデジタル技術を最大限に活用することが求められています。

こうした状況を踏まえ、台東区立中央図書館では、令和7年度から8年度にかけて施設の老朽化対応に併せて機能強化の工事を実施する予定です。そこで、令和4年度から2か年にわたり、「台東区立中央図書館の機能強化」をテーマにした意見交換会を実施しました。学識経験者や学校関係者、区民の皆様など、多様な専門知識や経験をお持ちの方々に、多岐にわたる視点からのご意見を頂戴しました。

この報告書は、リニューアルのコンセプトである「明るく開放的な図書館」「誰もが利用しやすい図書館」「交流できる図書館」を踏まえ、委員の皆様からいただいたご意見を整理しまとめたものです。

本意見交換会を通じて得られた提案やアイデアをもとに、今後の施設整備およびリニューアル後の運営を推進してまいります。

最後に、2年間にわたり台東区立中央図書館の取り組みを理解し、貴重なご意見をくださった委員の皆様には厚く御礼申し上げます。

令和6年3月  
台東区立中央図書館

## II 台東区立中央図書館の課題と機能改善のコンセプトについて

### 1 対応すべき課題

#### (1) 老朽化対策と新しい時代に即した空間づくり

老朽化した設備等の更新及びユニバーサルデザインの導入に加え、利用者が訪れたいくなるような魅力ある読書空間づくりが必要。

#### (2) 利用しやすい環境整備

「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」（読書バリアフリー法）の施行により、これまで以上に障害者の方も本や情報にアクセスできる読書環境整備が必要。また、ICT技術の進展により、ICTを活用した学習等に対応できる環境整備が必要。

#### (3) 生涯学習を支える新たな機能

静かな読書や個人学習にとどまらず、図書館の資料や情報を活用して、仲間と話し合うことにより様々な課題に取り組める環境整備が必要。

### 2 コンセプト

自然の光と木のぬくもりを感じる

**明るく開放的な図書館**

- 図書館全体を木目調にリニューアル
- 図書館案内サインのデザイン・色の統一化

「人」と「本・情報」をつなぐ

**誰もが利用しやすい図書館**

- 読書バリアフリー環境の充実
- 郷土・資料調査室「企画展コーナー」のレイアウトの変更
- カウンターの拡充
- Wi-Fi環境の整備及び電子機器持込席の増設
- ICTの活用

「人」と「人」をつなぐ

**交流できる図書館**

- こどもとしょじつ「おはなしのへや」の拡充
- (仮称)アクティブラーニングルームの新設
- (仮称)ワークショップルームの新設

### Ⅲ 台東区立中央図書館の機能強化に係るご意見

#### 1 明るく開放的な図書館

##### (1) 空間について

- 図書館は物理的・雰囲気的にも明るくすることが重要である。近年は、建築や空間設計に特色を出し、雰囲気を楽しみながら読書に浸れる空間を大事にする図書館が増えている。利用者が来館し滞在したくなる明るく楽しい空間を形成することが重要である。
- これからの図書館には本や情報を介したコミュニケーションの場としての機能が求められる一方、静かな場所を必要とする利用者も存在する。そのため、一部エリアを賑やかに、他のエリアを静かに運営するなど、ゾーニングが重要になる。また、スペースに制約がある場合は、時間によるゾーニングの方法もある。これからの図書館の空間づくりは、部分的にゾーンや時間を分けることにより、多様な利用を認めていくことが重要である。
- 図書館内のスペースを上手に活用して本を展示するなど、空間を十分に活かした工夫が必要である。

##### 〔取組み例〕

- ・物理的・雰囲気的な明るさを十分に取り入れたレイアウト
- ・目的や利用に応じた場所及び時間のゾーニング
- ・図書館スペースを有効に活用した本の展示 など

##### (主なご意見)

- ・現在の台東区の図書館はあまり明るい環境ではなく、利用者も図書館員も暗くなりがちである。そのため、明るく楽しい空間を提供する必要がある。
- ・図書館不安という概念があり、第一印象が利用者の次回利用に影響を与えるという説もある。物理的にも雰囲気的にも明るいというのは非常に重要である。
- ・図書館の将来の方向性として、静かな読書環境よりも地域のコミュニケーションの場として発展させるならば、明るく楽しくという視点から元気にコミュニケーションが取れる場として空間を考えていく必要がある。
- ・曜日や時間でイベントや交流スペースを区切ることで、スペースが不足している図書館でも実質的なスペースの確保が可能。
- ・閉架の本は出してもらえばいいので、もう少し開架スペースを広くとった方がいいと感じる。
- ・階段を活用して本を展示している図書館もある。図書館内のスペースをうまく活用することが重要。
- ・隣の公園と連携して、公園での読書ができるといい。

## (2) 書架について

- 利用者との新たな本の出会いや発見を促すためには、魅力的な書架づくりが不可欠である。
- 特に特集コーナーでは、時期や旬な話題に基づいて特集を組んだり、あるテーマについて入門から応用まで学習段階に応じた資料を順に配架する「学習段階順配架」を取り入れたりするなど、利用者が思わず手に取りたくなるような工夫が必要である。
- また、棚を眺めるだけで本の表紙から今の日本や世界の情勢を体感できることも重要である。そのため、本の面出しや独自ジャンルによる配架などの取組みを積極的に行っていくことが求められる。
- 利用者が参加して棚や特集コーナーをつくる取組みを進めると、多彩な視点での書架づくりが可能となる。また、陳列された本の感想を利用者が書いたり、POP や帯を利用者がつけることで、対面ではなくても本を介した会話が生まれ、利用者同士の学び合いが実現できる。

### 〔取組み例〕

- ・面出し（表紙が正面から見えるように配架する方法）での配架
- ・独自のジャンル区分や学習段階順配架の導入
- ・特集で紹介されている資料が常にわかるような表示の工夫
- ・利用者に棚や特集コーナーを作ってもらったりPOPや帯をつけてもらう取組みなど

### (主な意見)

- ・現在の書架の配置は悪くない。最近は特集コーナーなどもあり、とてもいい。
- ・図書館や本屋に行って、普段見ない本に気づくことが一番大事だと思っている。
- ・新聞から本に出会い、それが連鎖的に他の本とつながり、そのプロセスが一つのストーリーのように感じられるような本との出会い方がある。図書館においても、時期や旬な話題に基づいて特集を組むと、魅力的で面白いと感じる人もいる。
- ・特集や新刊コーナーの本は借りられていき、最初に何があったのかわからなくなるので、印刷やサインージュを活用するなどしてわかるようにしておくといい。
- ・十進法は自分で探すのは難しい。一方、新刊や特集は非常に見やすく、見て面白いと手に取りやすい。
- ・既存の分類法に加えて、独自のジャンル名などがあってもいい。
- ・棚を眺めるだけで、面出しになっている本の表紙から今の日本を体感させ、感覚で入ってくる情報というのが有用。

- ・探すための分類ではなく、学ぶための配架・分類みたいなものもあっていい。特集コーナーなどで、あるテーマを学ぶのであれば、こういう本をこういう順番で読んでいくと学べる「学習段階順配架」を提案したい。ただし、誰かがこの本を借りてしまうとシステムが機能しなくなるので、貸出を制限するか、または複本を用意し、いつでもそこにあるようにしておくことが大事。
- ・利用者の力を借りて、詳しい人が棚をつくることを推奨する。棚や場所が限られているのであれば、デジタルの力を借りて、パスファインダーやリストを作ってもいい。また、利用者が集めた本を読んだ人たちの声を集めることで、感想を読んだ人たちが学ぶこともある。さらに、POPや帯を使うなど、利用者同士が本を通して会話をするようなやり方を工夫すると、利用者が本を介して学び合うようなことが実現できる。

## 2 誰もが利用しやすい図書館

### (1) カウンターについて

- カウンターに立つ図書館スタッフは親しみやすく、利用者に対して丁寧かつ迅速に対応することが大切である。
- 問い合わせの内容ごとに指定箇所を設けるなど、利用者が容易にアクセスしやすいサインやレイアウトが重要である。
- 自動貸出・返却機や座席予約システムの導入により、図書館のカウンター業務は利用者からの相談や質問に対応することに集中する必要がある。特に、子供や高齢者に対しては、直接本棚を案内するなどの配慮が求められる。

### 〔取組み例〕

- ・「貸出」「返却」「案内」「相談」など、問い合わせ内容別の窓口の設置
- ・利用者の動線やアクセスビリティに配慮したレイアウトやサイン
- ・カウンター業務を相談・質問対応に集中                    など

### (主なご意見)

- ・カウンターの印象として、忙しそうに仕事をしていてなかなか声をかけづらいと感じている。
- ・問い合わせ内容を掲示するなど、利用者がどの窓口に行けばいいかという情報を明らかにすれば、利用者もそれに沿って動いてくれると思う。
- ・自動貸出・返却機や座席予約システムを導入により、カウンター業務は、利用者からの相談質問にエネルギーを注ぐべきである。また、図書館員が利用者と一緒に本棚に行って探すことも重要である。特に子供や高齢者に対しては配慮すべきである。



## (2) レファレンスについて

- レファレンスは、利用者の調べ物を手伝うサービスであり、仕事や生活で抱える課題を、図書館員が資料を活用して解決に導く重要な役割を担っている。しかし、一般的な認知度が低い。そのため、これまで以上に区民への周知を積極的に実施し、レファレンスサービスの活用促進を図っていく必要がある。
- 利用者からの相談や質問に対し、図書館員は誰でもどこでも迅速に対応することが重要である。また、調べる意欲のある利用者に対応した仕組みも必要で、その際、高齢者や若者、子供などそれぞれの立場を考慮して構築しなければならない。
- レファレンスサービスを体系的・継続的に取り組む体制を整備することが充実につながる。
- 新任職員に対しては、調べ方に関する一定の研修を実施し、一定レベルのレファレンスの知識とスキルを習得させる必要がある。

### 〔取組み例〕

- ・ポスターやチラシ、広報誌などを通してレファレンスを分かりやすく紹介
- ・「あやふや文庫」等の企画や質問事例の公開により、本サービスのイメージを伝えて興味関心を喚起
  - ※「あやふや文庫」とは、「タイトルが思い出せない、本の一部しか覚えていない、あやふやな本はありませんか？」というコンセプトで、ツイッターで「こんな本を探してください」という情報を集め、返信してあげる活動。
- ・若者へのアピール方法として、ツイッターに質問事例を定期的に投稿
- ・“レファレンス”の表現をより親しみやすいわかりやすい日本語に変換
- ・入口近くに相談できる場所を設置し、利用者が気軽に質問できる環境を整備（質問対応のための百科事典や国史大辞典などの頻度の高い辞書類もカウンターバックに設置）
- ・書架案内については、請求番号と該当書架に○をつけた書架図を手渡して対応
- ・小さな子供や高齢者に対しては配慮し、図書館員が書架を案内図書館員が利用者と一緒に書架に行くなどの配慮
- ・質問事例を公開するといいい。若者に対するアピール方法として、定期的にツイッター
- ・よく聞かれるテーマの分類番号と書架番号一覧の作成
- ・夏休みの自由研究等に活用できるパスファインダーの作成
- ・OPACの検索方法や結果の見方などを記載した案内シートの作成
- ・商用データベースの利用方法の周知
- ・館内各所に調べ方やインターネット情報源、商用データベース、専門図書館等の案内などを記載したリーフレットの設置
- ・OPACや商用データベースの活用講座を実施
- ・レファレンス受付のチャンネルを拡大
- ・デジタルアーカイブの利用促進（台東区立図書館や国立国会図書館など）

### (主な意見)

- ・レファレンスサービスは一般的な認知度が低いため、その存在を利用者に周知する必要がある。
- ・図書館を見渡してみても、レファレンスサービスの内容やデータベースに関する情報がない。
- ・目に見える場所にポスターやチラシを掲示したり、デジタルサイネージを活用したりして、具体的な内容を分かりやすく紹介することが必要である。
- ・「あやふや文庫」のような企画を通じてレファレンスサービスのイメージを伝えて利用者の興味を引き、レファレンス利用者数の増加に繋げるといい。
- ・入口付近に相談できる場所を設置すると効果的である。
- ・質問事例を公開するといい。若者に対するアピール方法として、定期的にツイッターに投稿することが有効である。
- ・「レファレンス」という言葉が堅苦しく感じられるため、より親しみやすい日本語の表現が望ましい。
- ・図書館は本の閲覧・貸出のみというイメージがあるが、郷土・資料調査室を利用して図書館員に質問すると適切な回答が得られ、非常に助かったという記憶がある。
- ・図書館では、「すぐに答えが欲しい」という利用者のニーズに対応するために、即応可能なシステムづくりが必要。例えば、書架案内は請求番号と該当書架に○をつけた書架図を手渡して対応、よく聞かれるテーマの分類番号と書架番号一覧の作成、夏休みの自由研究等に活用できるパスファインダーの作成など。
- ・「自分で調べたい」という利用者の要望に応えるために、OPACの使い方からオンラインデータベースの活用方法までを網羅した仕組みを図書館に設けるべき。例えばOPACの検索方法や結果の見方などを記載した案内シートの作成、館内各所に調べ方やインターネット情報源、商用データベース、専門図書館等の案内などを記載したリーフレットの設置など。
- ・図書館の仕組み作りは、子供や利用者の立場に立って設計することが重要である。
- ・レファレンスは、様々なチャネルを使うことが重要。  
(対面、メール、電話、FAX、チャット、SNSなど)
- ・国立国会図書館のデジタル化が進み、音源も含め浅草に関する資料も増えているので、活用していくとよい。利用者への案内は実演も交えて行うと効果的である。

### (3) 読書バリアフリーについて

- 障害の対象者の範囲をより広げて図書館を利用しやすい環境に整えることが重要である。視覚障害だけではなく、発達障害や知的障害、さらには一般的に障害とみなされない人々までも含めて施策を考えていかなければならない。一人ひとりの状況に応じた細やかな対応が求められる。
- 利用者の意見を聞いたり、読書バリアフリーに精通した団体や研究者の協力を得ながら進めるなど積極的に新たな取組みを行うことが重要である。23区で初めて取組むことによりメディアで取り上げられ、さらなる利用促進につながる可能性がある。
- 読書バリアフリーは、特別な空間に限らず取組むべきであり、障害の有無にかかわらず利用しやすい環境を目指すことが重要である。

#### 〔取組み例〕

- ・ 障害の範囲を広げて一人ひとりに合った細かいサービスを実施。(弱視の人に適したサービスや、色覚異常の人に配慮した本の提供、読字障害の子供たちへのテクノロジーを活用したサポートなど)
- ・ 障害のある方でも気兼ねなく利用できる環境を整備

#### (主な意見)

- ・ 全国初や23区初などの新しい取組みを行うことで、それがニュースとなり、図書館の利用促進につながる可能性がある。
- ・ メンタル的に不調の人や身体が不自由な人、高齢者などを含め、読書障害の視点からきめ細かなサポートをすることで、全国的に注目される可能性がある。
- ・ 読字障害など、読書が苦手な子供たちに対する支援として、本の上にスマホをかざすと音声で読み上げてくれるテクノロジーを活用した教材やツールがあるので、これらの機器を活用する方法もある。
- ・ 誰かに読んでもらったり、聞いたり、歌ったり、踊ったりするなど、様々な形式の読書があっていい。そのためにテクノロジーを活用することが必要。
- ・ 利用者の意見を十分に聞き入れて取り組んでいくことが重要である。専門の団体や研究者との協力により、困難な問題も解決できる。
- ・ NPOや学校や障害者団体など、その分野の知識が深い方々と協働することも重要。
- ・ デイジー図書などをより多くの利用者に知ってもらうことが重要。
- ・ 発達障害の子供や保護者にとって、他の人に気を使わずに少し騒いでもいい空間や安全対策が整った場所が提供されることは、安心して利用できる要因となる。
- ・ 障害者の方が自然な形で利用できる空間を作ることが重要である。特別な席を設けるのではなく、普通の席でも利用できるようにすることを目指すべき。

#### (4) ICT 環境の充実について

- 図書館に限らず「生涯学習センター」全体での Wi-Fi 環境の整備は不可欠である。また、今後は、座席予約システムの導入など、デジタルを最大限に活用して、利用者の利便性の向上や図書館業務の効率化の取組みを推進していく必要がある。
- デジタルサイネージ（電子看板）の活用により、印刷や掲示の手間を省力化できるだけでなく、明るく鮮明な画像や動画を表示し、視覚的なインパクトを与えることができるため、情報を効果的に伝える手段として有効である。また、図書館情報を流すだけでなく、案内機能や利用者同士の情報共有の機能としても活用が可能である。

#### 〔取組み例〕

- ・ 図書館内全体に Wi-Fi 環境を整備し、電子機器持込席を増設。
- ・ 閲覧席予約システムを導入し、館内及び Web 上での座席予約を実施
- ・ デジタルサイネージの導入・活用
  - 例) ・ 情報を流すだけでなく案内機能も含めた活用
    - ・ 子供など利用者が作成した作品や感想をディスプレイ
    - ・ 閲覧席の予約や図書館内の混雑状況の提示 など

#### (主な意見)

- ・ 今、教育現場では一人一台のタブレットが浸透しているため、図書館でも Wi-Fi 環境を含むタブレット利用ができる場があるといい。Wi-Fi 環境や協働学習が可能な環境が整っていれば子供達は図書館に行き、一緒に勉強したり、タブレットを使って学習したりすることができるのではないか。
- ・ Wi-Fi 環境の整備は、図書館だけでなく生涯学習センター全体で検討する必要がある。
- ・ 図書館のカウンターでの席取りや予約延長等の業務をデジタル化し、情報の可視化・省力化が可能となり、並ぶ手間も減らせる。
- ・ 図書館に行く際、無駄足になりたくないの、リアルタイムで席の空き状況や混雑状況がわかると便利。
- ・ デジタルサイネージは一括管理と配信が可能で、物理的な印刷や掲示の手間を省力化できる。
- ・ デジタルサイネージの活用方法として、情報を流すだけでなく、小さいタブレットのようなデバイスでの案内も可能。
- ・ 図書館内の混雑状況を示すツールとしてもサイネージは役立つ。WEB カメラを利用すれば、どこが空いているかすぐに分かる。
- ・ 利用者が作成した作品や感想などをディスプレイすることで、利用者同士の情報共有が可能。

### 3 交流できる図書館

#### (1)「こどもとしよしつ」について

- 「こどもとしよしつ」には、乳幼児親子から小学生まで幅広い年齢層が来館し、読書に限らず、親子のコミュニケーション、おはなし会、調べ学習など、本を介した様々な活動が繰り広げられる。そのため、それぞれの目的に合わせて利用できるレイアウトや本の配置が重要であり、椅子やテーブルなどの図書館什器にも十分に配慮する必要がある。子供が居心地よく読書を楽しめる空間を整えることが大切である。
- これからは、大人である図書館員だけではなく、子供達も図書館づくりに関わることでできる利用者協働の取組みを積極的に進めていくことが重要である。例えば、子供や親子が好きな本を並べて特集棚をつくったり、「こどもとしよしつ」の装飾を学校や幼稚園単位で行ったり、子供達がつくった作品を展示したりするなど、子供達が図書館づくりに関わることでできると、より過ごしやすい楽しい居場所となる。さらに、子供達が読む本は、同年代が読んでいるものが多いため、本にポップ（ラベル）、帯、紙挟みを利用して利用者が推薦するメッセージを付けるなど、子供達同士が本を紹介できる取組みも考えられる。

#### 〔取組み例〕

- ・ 目的や年齢によるゾーニングを考慮したレイアウトや本の配置
  - ・ 「おはなしのへや」では、子供達やその保護者がゆったりと居心地よく本を楽しめるよう、床や椅子・テーブルなどの機能や素材に配慮
  - ・ 子供達が図書館づくりに関わることでできる取組みと仕組みづくり
- 例) ・ 子供や親子がつくる特集棚の設置
- ・ 子供による「こどもとしよしつ」の装飾
  - ・ ポップや帯を活用した推薦メッセージをつけるなど利用者同士が本を紹介し合う取組み

#### (主な意見)

- ・ 子供はある程度物理的に制限があった方が落ち着くことから、座るスペースが明確である方がゆっくり本を楽しめることができる。
- ・ 「おはなしのへや」に座れる空間や座卓のようなテーブルがあるといい。
- ・ 小学生は友達と一緒に来館することが多いため、コミュニケーションをとることができるエリアを設置するとよい。
- ・ 子供達が好きな場所で読書を楽しめるよう、使い終わったら片付け易く、重ねて置ける椅子があるといい。
- ・ 現在の「おはなしのへや」は小さい子とゆっくり本読むには居心地が悪い。衛生面に配慮しつつもクッションなど、もたれかかることでできるものが欲しい。

(主な意見) ※つづき

- ・「こどもとしょじつ」のターゲットは、乳幼児から小学6年生までと広いため、年齢に応じた本を配架するなどエリアを分けたり、ジャンルごとに分けたりするなど、子供たちが自分で本を探し選びやすい配置の工夫が必要である。また、絵本に多く共通する普遍的なテーマ毎に分けると親目線でも探しやすい。
- ・子供たちは、見てわかる視覚的に入ってくるものには一番興味を示す。
- ・保護者が行ってみようという気持ちになるのが一番よく、一緒に楽しみたい、行ってよかったと思えるような場であるといい。
- ・装飾などは利用者が行えるようにするとよい 学校や幼稚園単位で飾り付けを行う子供たちが作った絵を展示するなど、利用者が図書館づくりに関わる仕組みがあるとよい。
- ・図書館の提供するサービスは大人側が子供に提供する側が多いが、視点を変える時期にきている。子供や親子が自分たちで特集棚をつくったり、自分の好きな本を並べたりする取り組みを実施するとよい。
- ・子供たちが読む本は、友人など同年代が読んでいるものが多いため、それらを紹介する取り組みを行うべき。 図書の整理に手間がかかる場合は、ポップ（ラベル）、帯、紙挟みを利用し、利用者が推薦するメッセージを付けるなどでも可能である。

## (2) (仮称) アクティブラーニンググループについて

- 学校教育においては、教育のアプローチが変化し、単なる知識の伝授ではなく、対話やグループワークを通じた協働学習が重視されるようになってきている。実際、総合的な学習などにおいて、調査学習や意見交換、発表を行う機会が増えている。また、今の若者は仲間と一緒に学ぶ「ピアラーニング」を好む傾向がある。こうした学習スタイルに対応するため、公立図書館においても、グループワークができる場所を提供する必要性が高まっており、近年建設された図書館の多くは、中高生を対象にした調査学習や議論ができるスペースを整備している。
- 台東区においても、従来の個人席に加えて、小中高生の児童・生徒を対象とし、図書資料やインターネットを活用してグループワークなどの協働的な学びができる「(仮称) アクティブラーニンググループ」を新設する予定である。
- この「(仮称) アクティブラーニンググループ」は、開かれた図書館の象徴となるべきであり、児童・生徒が集いやすく、学びやすい環境を整える必要がある。そのため、どのような学びの場を提供し、どのように環境を整備していくか、また、どうやれば図書館の本をうまく使ってもらえるかなどを十分に考慮した上で、より効果的に活用してもらうための「仕掛け」をつくることが重要である。

### (主な意見)

- ・「(仮称) アクティブラーニング」は開かれた図書館の象徴となる可能性があるが、利用を促すためには何かしらの仕掛けが必要である。
- ・今の若者には友達と一緒に勉強する文化がある。困ったら教えてくれるお兄さんやお姉さんあるいは友達がいるというのがとてもよく、いわゆる「ピアラーニング」という概念で、大学では主流になりつつある。その時に、図書館の本をうまく使ってもらうことが大事。
- ・公共図書館は静かに利用するものという認識が強く、これが子供達が図書館を利用したいと思わない原因になっている。子供達が図書館で活発に活動できることを理解させるための周知が必要となる。
- ・学級単位での調査学習や小中高生が自由に利用できるスペースなど、話し合いながら学習できる環境を整えている図書館が増えてきている。
- ・新しくできる図書館は、喋っては駄目というところの方が少ない。逆に喋る方がデフォルトになってきている。場合によっては飲食もOKな公共図書館が増えてきている。部分的にゾーンや時間を分けて多様な使い方を認めることが大事。
- ・学校図書室との差別化として、友達と積極的に話すことができるスペースの設けることが必要。
- ・従来の図書館のイメージは静かにしなければいけない場所であり、個人1人で勉強する場だという認識があった。今の中学生は環境問題などのテーマで議論し、自身の意見を述べる場を経験している。図書館においても、子供たちが意見を述べる場や、本について語る場、ビブリオバトルなどの企画を考えると良い。

## ①協働的な学びの場

- 協働的な学習を行うには課題が不可欠である。そのため、図書館は学校と密に連携し、学校の学習カリキュラムを把握する必要がある。その上で、課題に即した資料を揃えたり、パスファインダーを作成したりするなどして、課題学習を行う場として学校に利用してもらうことが重要である。さらに、放課後に子供達が仲間と学びやすい環境にすることも大切である。
- 学校での活用促進を図るには、調べ学習からグループワーク、発表までの一連の活動ができるツールや環境を揃える必要がある。文房具や模造紙、ホワイトボードやクリップボード、調べ学習用のパソコンやモニター、Wi-Fi 環境など、アナログからデジタルのものまでを整備しておくことが重要である。
- 「(仮称) アクティブラーニンググループ」において、図書館が期待する活動を子供達に促すためには、学校の先生方に活用例を提示したり、子供達に活用方法を体験してもらうなどして、実際に活用してもらえるような働きかけをしていかなければならない。特に子供達には、話し合いながら考えることが楽しいという体験の機会をつくることが重要である。

### 〔取組み例〕

- ・学校の課題に即した資料やパスファインダーの作成
- ・利用についての周知及びガイドブックの作成・配付
- ・課題学習に必要な環境整備（ホワイトボード、クリップボード、調べ学習用のパソコン、モニター、Wi-Fi 環境、文房具、模造紙など）
- ・課題を設定した小中高生向けのワークショップの実施

### (主な意見)

- ・学校では、地域の歴史や文化を調査するなど、様々な課題が設定され、個人またはグループで新聞作りなどの成果物が求められる。子供達が調べ学習や協働的で対話的な学びを実践するには、どのような課題を設定するかが重要。そして、文房具や模造紙があり、インターネット環境が整っている場所があれば、全ての学習活動を行うことができ、より集中して取り組むことができる。
- ・協働的な学びや対話が必要になる課題や仕掛けを整えるといい。その時に整備された環境があると、その場を活用して子供は自主的にどんどん学習を進められると思う。
- ・学校と図書館が密に連携し、図書館でどのような課題を行うかを決定することが重要。一部の自治体では図書館と学校が共同で教材を作成するなどを行っている。学校教育のカリキュラムに少し寄せるといのが一つの方向性である。
- ・フリップチャートやテーブル数分のパソコン、それに対応するモニターがあることが望ましい。



### (主な意見) ※つづき

- ・課題を設定し、ポストイットやホワイトボードでアイデアを引き出したり、知育向けボードゲームでアイスブレイクをするなど、話し合いながら考えることが楽しいという体験ができる小中高生向けのワークショップを実施する。
- ・図書館において調べ学習やグループワークができる環境が整備されることを理解してもらうためには、学校の先生方も含めた適切な働きかけが必要。
- ・部屋は広く使うべきで、必ずしも本を常設する必要はない。
- ・中高生に対して議論の方法を教えるため、ファシリテーターのような役割を持った人材の育成や採用が有効。

## ②学習支援と交流の場

- 小中高生の利用や利用者同士の学び合いを促進させるための「仕掛け」として小中高生向けのイベントを定期的で開催していくことが重要である。その際、図書館単独で行うのではなく、子供達による企画・運営、NPO 法人や地元企業の協力、庁内関係部署との連携など、多様な主体と協働で進めていくことが求められる
- 学校だけでなく、図書館も友達同士で学び合ったり、お兄さんやお姉さんから勉強を教えてもらったり、専門知識を有する地域の方々から学んだりする機会を設けるなど、地域全体で子供の教育を支援するという視点が重要になる。その際、図書館資料の活用方法を教えていくことが大事である。

### [取組み例]

- ・書籍の多様性を知ってもらうための取り組み(「科学カフェ」などのイベント実施)
- ・区内の中学校の図書委員を集めて本について語る機会の創出(ビブリオバトルなど)
- ・ビブリオバトルなど子供たち自身が企画立案できる機会の創出(中・高生だけではなく、大学生のボランティアなども参加することで縦の関係の構築も可能)
- ・中高生がつくる特集コーナーや掲示板の設置
- ・中高生を対象とした「図書館を使った情報活用講座」の実施
- ・理系教育の一環として IT を活用したものづくりの場としての環境整備
- ・区民、NPO 法人、地元企業、庁内各部署との協力・連携による実施

### (主な意見)

- ・子供向けの図書室は読書だけのイメージが強いが、様々なジャンルの本や勉強に役立つ本も多い。子供たちにそれら書籍の多様性を知ってもらうための取り組みとして「科学カフェ」のようなイベントを開催するとよい。
- ・図書館においても、子供たちが意見を述べる場や、本について語る場、ビブリオバトルなどの企画を考えると良い。例えば、区内の中学校の図書委員を集めて本について語ってもらうなど子供が活躍できる場を図書館で設けることができればよい。
- ・交流の場を大人が提供するでもいいが、子供たち自身が企画を立案し、自分達で楽しむ取り組みを行うとよい。ビブリオバトルなどはとてもいい題材。中・高生だけではなく、大学生のボランティアなども入れると、縦の関係ができる。
- ・ある書店において、近隣の中学校・高校の図書委員に学校単位で壁一面にポップを作ってもらえるコーナーがある。こうした地域連携があるといい。
- ・中高生が参加できるイベントは、SNSを活用して発信していくといい。来たら面白いよねということができたらいと思う。
- ・学習支援という観点で塾の代わりのようなことがあってもいいのではないかと思う。友達同士でコミュニケーションをする場を作っておけることは図書館の役割としてもいいのではないかと思う。
- ・学校教育と図書館を結びつけ、授業だけでなく課外活動や部活も含めた教育活動を図書館も行うことが重要である。学校だけではなく、地域全体で子供の教育を支援するという視点が重要になる。それにより、家庭環境の格差から生じる学力差を埋められ学校の先生の労働環境の改善にもつながる。
- ・学習支援といった機能を図書館に持たせることも重要である。勉強に困った子供たちに対して、お兄さんやお姉さんが手助けするような場を図書館が設けるとよい。その際、どうやれば学びやすくなるか、図書館の本をうまく使ってもらえるかということに配慮することが大事である。ある自治体では、「図書館を使った情報活用講座」を実施し、中・高生が活用し学習する環境の創出している。
- ・広い意味でのSTEAM（サイエンス・テクノロジー・エンジニアリング・アート・数学）の教育を重視するものづくりの場としての環境整備も大事。その際、子供達同士での学び、お兄さんお姉さんや、地域の企業の方から学ぶなど、ピアラーニング（学び合い）という意味での協働が重要。
- ・放課後の自習や何かをさせるときにグループにすると、教え合ったり、周りの子のノートをのぞいて書いたりなどの相互作用が起こりうる。

### ③中高生の居場所

○図書館は中高生の安全な居場所となりうるものであり、それを形成するためには、多少のルールの緩和も必要である。例えばゲームを許容する日を設けるなど、子供たちがリラックスして過ごせる空間となることが大事である。

#### 〔取組み例〕

- ・ e スポーツデーの設定

#### (主な意見)

- ・ 中高生の居場所は今とても大事である。図書館は安全な場所であるため、中高生が集い、そこで何か学びが生まれればなおいい。その時に、あまり規制を張ると居場所にならないので、例えばゲームをやってもいいとか、ゲームの日があってもいい。海外では e スポーツをやる図書館もある。

### (3) (仮称) ワークショップルームについて

- 近年の図書館は、子供向けの事業に限らず、大人向けの講座やイベントを実施する図書館が増えている。それは、より多くの方に図書館に来館し、本と情報を活用してもらおうためである。そのため、図書館で実施する講座やイベントには、本と人を結びつける要素が必要である。
- リニューアルを機に中央図書館では、講座やイベントが開催できる(仮称)ワークショップルームを新設する。子供だけでなく、大人の学びの場としての機能を強化させていくことが重要である。
- 図書館の役割には「読む」「学ぶ」「本を介しての人間間の対話」という3つの要素がある。図書の閲覧・貸出だけではなく、これらの要素を取り入れたワークショップやイベントを積極的に実施していくことも必要である。

#### 〔取組み例〕

- ・アイデアを出し合うワークショップや交流イベントの実施
- ・区民主催の読書イベントの実施 など

#### (主な意見)

- ・図書館は、多くの人々に本と情報を活用してもらうためにイベントを開催している。例えば、映画会で本の紹介を行い、関連書籍を会場入口に並べてすぐに借りられるようにする。これにより、本と人を繋げることを目指している。
- ・人と本を結びつけるために、イベントで本を前面に出すだけではなく、引用などを通じて少しずつ導入するなど、多様な学びのトピックを支える存在として本を活用することも有効。
- ・ワークショップルームでの開催可能なイベントは、一方通行の内容よりアイデアを出し合うワークショップや交流イベントが望ましい。
- ・ワークショップルームにて一般の利用者がイベントを企画・運営する際には、当初はどう企画・運営していいかわからないので、図書館が一定の方向性を決定し、具体的な選択肢を用意して利用者がそれを選べるようにするとよい。
- ・学び合うピアラーニングを推進するため大人版の学習スペースとして活用し、商店街や地域組合等の大人たちが定期的に学ぶ場所として、図書館が支援を行うとよい。
- ・日本の図書館は、静寂を重視する傾向がある。紀元前3世紀のアリストテレスが作った図書館では、「読む」「学ぶ」「本を仲立ちとして人々が対話する」の3つが重要視されていたとある。戦後、図書館の役割としては、「読む」「学ぶ」「本を介しての人間間の対話」という3つが重要であり、図書館はその知識の基盤施設であるべきだが、日本の図書館はこの役割を十分に果たせていない。

## IV 今後求められる図書館運営

### (1) 利用者協働の取組み

- 限られた人員で多岐にわたる区民ニーズに対応するには、図書館単独ではなく、区民、地域団体、NPO法人、企業など多様な主体と協力・連携して図書館づくりを行っていくことが重要である。
- 今後、協働型の手法を図書館運営に取り入れていくには、協働によって事業を行う意識と発想が職員に必要である。協働を前提に新たな取組みを提案できる図書館員が求められる。

#### 【取組み例】

- ボランティアの活用
  - ・(仮称) アクティブラーニンググループサポーター業務(ファシリテーター・中高生向けイベントの企画・運営・小学生や中学生の学習支援など)
  - ・特集棚やパスファインダー等の制作 など
- 学校との連携
  - ・学校単位での棚や掲示板づくり など
- 利用者との協働
  - ・特集棚やパスファインダー、POP や帯づくり
  - ・こどもとしょじつの装飾 など

#### (主な意見)

- ・更なる事業の企画・運営は、図書館職員の負担を増大させるためにも、利用者協働を積極的に取り入れるべきである。
- ・大学では学生協働の取組みが進んでおり、美術館や博物館でも市民のボランティア協力を得ているところが多い。
- ・ある図書館では、大学、高校、観光関連機関と協力して運営しており、高校生や大学生が企画を立て、ボランティアとして働いている。また、近所の英会話学校が英会話資料や講座を寄付するなど、図書館や市だけでなく、周りの人たちも巻き込んで運営をしている。
- ・協力の相手は個人に限らずNPO、学校、地域の企業など多様な主体が考えられる。
- ・こうした協働の取組みは、人々の得意分野を活かしていると考えており、新しいアイデアの発生や人手不足の解消に繋がるものである。
- ・台東区の地域特性を反映させて資料収集を行うため、住民の意見を交換する場があってもいいと思う。国際図書館連盟では、中高生が選書に関わることを推奨している。

## (2) 図書館DX（デジタルトランスフォーメーション）の取組み

### ①DXの推進に向けて

- 今後、図書館のDXを推進するには、図書館の取組方針やリニューアルのコンセプト、区民ニーズなどを踏まえ、明確な目標を設定することが重要である。その上で、図書館サービスの利便性を向上させるために、対象者や制約（時間的制約・身体的制約・物理的な移動制約など）を考慮して、それぞれに対応したサービスの提供を検討する必要がある。例えば、電子図書館やネット予約などは、利用時間や身体的な制約を克服するサービスの提供と考えられる。
- 図書館内に留まらず、区民の生活をDX化することを意識して取り組む必要がある。例えば、オーディオブックを様々な生活シーンで利用してもらうために、耳からの読書を体験できるタッチポイントを図書館内に提供するなどが考えられる。
- 人員や財源などの限られた資源の中でテクノロジー化に取り組むためには、必要性を見極め、選択と集中により優先順位をつけることが重要である。その際、図書館未利用者に対するサービスも考えていく必要がある。
- AIやDXなどの多くは協働利用モデルに移行する傾向がある。そのため、東京都や大学、企業等と協働で行うなど、多様な機関との協力が重要である。これにより、コスト削減にも貢献できる。

### (主な意見)

- ・まず目標やゴールを明確にする必要がある。台東区図書館の目標や機能改善のコンセプトを達成するためのDX戦略を考えるべき。
- ・図書館サービスの利便性を向上させるために、対象者と制約（時間的制約・身体的制約・物理的な移動制約など）を考慮して、それぞれに合わせたサービスの提供を考えると良い。例えば、電子図書館やネット予約などのテクノロジーを活用して、利用時間や身体的な制約を克服するサービスの提供、子供向けには学校での受取りなどの物理的な制約を考慮したサービスの提供が考えられる。
- ・図書館の運営側も利便性の向上を図れるシステム化にすることが望ましい。
- ・図書館内をDX化していくことよりも、図書館が主導して区民の生活をDX化の方が意味があると感じられる。具体的には、オーディオブックの体験を通じて、読書の快適さを実感し、図書館内でその体験ができるようなタッチポイントを提供することが重要である。オーディオブックの普及を通じて、暮らしをDX化し、読書人口を増やす効果が期待される。
- ・重要なことは、ゴールを設定する際にニーズを考慮すること。必要性があるものから始めることが重要であり、どこが最優先かを見極めることが必要。テクノロジーを使えば何でもできるが、優先順位をつけて必要なものに集中しなければ、資源が不足することになる。

(主な意見) ※つづき

- ・図書館のサービスを利用していない人々にアプローチするために、テクノロジーを活用することが重要。電子化が進む中で、図書館に来ない人々にサービスを提供する方法を考える必要がある。
- ・財政面では、区単位での運営が限界に達しているため、AI や DX などの多くは協働利用モデルになっていく。これにより、東京都や大学などとの協力体制が重要となり、コスト削減にも貢献する。したがって、今後は区や市だけでなく、他の地域との協力を含めた運営を検討することが重要である。
- ・絵本のデジタル化により、子供たちが探しやすく、家庭での選択が可能になると、絵本の楽しみが広がると考えられる。
- ・学校現場では、デジタル技術を活用する一方で、紙を使って考える方法も重要である。デジタルはあくまでも一つの道具であるため、最終的には子供達の成長にどう役立つか、どのような力を身に付けさせたいのか、そのために有効な道具は何かを見極める必要がある。
- ・デジタルとアナログ、リモートとリアルの区別が曖昧になってきている現代では、技術はデジタルに限定されず、様々な資源や手段を活用することができる。図書館はそこを大事にしてきたため、本もデータベースもある。

## ②電子図書館について

- 電子書籍は、来館せずにいつでもどこでも24時間利用ができ、文字の拡大や読み上げなど、障害者サービスとしても有効である。その一方で、依然としてコンテンツ数が少ないため、次第に使われなくなる例がある。導入の際にはコストパフォーマンスも含めて十分に検討を行うことが必要である。
- 電子書籍の利用を促進するためには、可能な限り待ち時間を解消し、利用者が速やかに書籍にアクセスできる必要がある。また、誰もが使いやすく読みやすいものにすることが重要である。
- 電子書籍導入の際には、ターゲットを絞る必要があるか、どのような方針のもとで収集を行っていくかなどを十分に検討し、収集方針の見直しを図っていくことが重要である。
- 児童・生徒が調べ学習や読書などで電子書籍を活用できるよう、小中学校での状況や学校の先生方の意見を伺いながら取り組むことが重要である。

### 〔取組み例〕

- ・導入に向けた検討(ターゲット・収集方針など)
- ・電子図書館を体験する機会の提供
- ・児童・生徒へのアカウント一斉配布による学校での利活用 など

### (主な意見)

- ・電子図書館は、特定のターゲットに焦点を当てて情報提供を行うことが効果的だと思う。例えばリスキングというターゲットに注力し、ビジネス書や資格取得に関する情報を提供すると良いのではないか。
- ・電子書籍を導入する際、収集方針との兼ね合いが問題となっている。例えば、資格関連の書籍や問題集は通常、図書館では購入されない方針があるため、これらの電子書籍の導入には課題がある。日本の図書館は教養重視の方針に基づいて資料が収集されている。電子書籍を導入する場合でも、収集方針の見直しや利用者の意見を取り入れる必要がある。
- ・電子書籍の利用を促進するためには、現在のベストセラーや人気書籍の待ち時間を解消し、利用者が速やかに書籍にアクセスできるような取り組みが必要。また、誰もが使いやすく読みやすいものにすることが重要。
- ・区内全ての小学生・中学生が図書館の電子書籍を検索・閲覧し、調べ学習や読書などで活用できるようになるとよい。その際、コレクションも学校の先生方も交えて検討してほしい。(八王子市、昭島市などで実施し授業で案内している。)
- ・現在、電子書籍のタイトル数は圧倒的に少ないため、導入当初は利用が盛んでも次第に使われなくなる例が多い。コストパフォーマンス的には、無理して導入する必要がないかもしれない。



### ③AIチャットボットについて

- AIチャットボットは案内だけではなく、イベントの予約など多岐にわたるサービスが可能であり、利用促進のためには使いやすさや多言語対応が重要である。
- 一方、AIチャットボットの作り込みには相当の時間と手間を要する。そのため、チャットボットを導入する際には、目的を慎重に考える必要がある。
- 導入した際には、AIを利用したチャットボットによる自動対応の利便性を図書館がしっかりアピールすることで利用者の促進につながると考えられる。また、利用に関する動画の作成や講座の実施なども効果的である。また、音声認識のオプションを導入することでより利便性が向上し、利用が浸透する。

#### 〔取組み例〕

- ・目的を明確にした上での導入検討
- ・音声認識入力や読み上げなどにも対応したシステムの検討
- ・導入した際には、利便性の周知を徹底（利用に関する動画作成・講座の実施など）

#### (主な意見)

- ・AIチャットボットは案内だけでなく、イベントの予約など多岐にわたるサービスが可能である。利用促進のためには使いやすさや多言語対応が重要。利用に関する動画の作成や講座の実施なども効果的である。
- ・AIを利用したチャットボットによる自動対応の利便性を図書館がしっかりアピールすることで利用者の促進につながると考えられる。
- ・現在の検索機能に対する小さなストレスや、両手がふさがっている場面での操作のストレスを軽減するために、音声認識のオプションが重要。また、AIによる誘導がUIに組み込まれることで、利用がより浸透する。
- ・体験を豊かにすることはDX的な考え方の一つであり、図書館を身近に感じさせるために重要である。ユーザー体験（UX）に重点を置いたアプリケーションの開発が重要であり、ユーザーの意見を取り入れ、ストレスやニーズに応えるアプリケーションを開発することが望ましい。
- ・AIチャットボットは様々な仕組みがあり、本当に使えるものにするためには、設定や学習をさせることがとても大変で時間と手間がかかる。
- ・AIのチャットボットは、作り込むのが大変なので、チャットボットを導入する際には、その目的を十分に考える必要がある。

#### ④AIの活用などについて

○AIを活用することで、コンテンツ検索やレファレンス管理、キーワードマッチングによる情報検索、障害のある方に対する読書支援など、様々なことが可能になる。

○AIの利用は広がりつつあるが、データに合わせた作業やコスト面で課題がある。AIを活用する目的や効果を踏まえ、狙いを定めて導入することが重要である。また、導入の際には、企業や大学、研究所等と連携して行うことが望ましい。

##### (主な意見)

- ・AIの活用方法に関してはコンテンツ検索の改善があげられる。チャットGPTの登場により、従来の単語検索よりもより自然な質問に対応できるようになった。また、メジャーな言語に関しては自動翻訳により円滑なコミュニケーションが実現できる。チャットGPTや多言語モデルを活用することで、さまざまな問い合わせに対応できるサービスの提供が可能となる。
- ・レファレンスの管理においても同様に、AIの学習を活用してレファレンスの履歴などを学習させることができる。
- ・AIを活用して、定型的な質問に音声で回答したり、また、メールレファレンスでの回答文作成にChatGPTを利用したりすることを検討すると良い。
- ・スマートフォンを使った貸し出しカードだけでなく、顔認証システムが導入されている。このシステムでは、利用者は顔認証で入館し、カードを持参する必要がないため、利便性が向上している。顔認証システムはコストの問題があるが、将来的には普及すると予想される。
- ・書籍管理においては、貸出実績などのデータを活用して本の配置や購入を最適化していくことが重要である。
- ・AIはキーワードマッチングで見つからない情報を見つけることができる。知らない分野であるとキーワードを思いつくことが難しい。そこで、適当なキーワードを入力していくとAIがお勧めしてくれるので、言葉が違っていても知りたい情報にたどり着くことができる。
- ・障害を持った人のために、読書を聞くことができるシステムが登場している。本のページや柱を認識し、スマートフォン1台でAIが読み上げてくれる。
- ・AIの利用は広がりつつあるが、データに合わせて調整する作業が大変で、コストがかかる。また、チャットGPTを組み合わせるとさらに高くなる。導入に狙いを定めることが大事。また、テクノロジーに強い企業と連携して一緒に行うことに意味がある。

## 参考資料

### 1 審議経過

令和4年度 第1回 令和4年9月22日（木）

○台東区立図書館の現状と機能強化について

令和4年度 第2回 令和5年2月8日（水）

○中央図書館における機能強化について

- ・相談(レファレンス)・案内について
- ・こどもとしょしつについて
- ・中高生の図書館利用の促進について

令和5年度 第1回 令和5年9月25日（月）

○中央図書館における機能強化について

- ・「(仮称)アクティブラーニングルーム」及び「(仮称) ワークショップルーム」について
- ・読書バリアフリー環境の充実について
- ・魅力ある書架づくりについて

令和5年度 第2回 令和6年2月29日（木）

○中央図書館における機能強化について

- ・図書館のDXに向けた取組みについて
- 「令和4年度・5年度 台東区立図書館意見交換会 意見のまとめ」について

## 2 令和4年度・5年度台東区立図書館に関する意見交換会委員名簿

(敬称略)

No.	区分	氏名	所属
1	学識経験者	大串 夏身	昭和女子大学名誉教授
2	学識経験者	野末 俊比古	青山学院大学教授
3	区民委員	田島 大輔	
4	区民委員	森 真奈	
5	学校・園関係者代表	福沢 俊之	台東区立御徒町台東中学校校長
6	学校・園関係者代表	佐藤 有理子	台東区立東上野保育園園長
7	社会教育委員	永田 晴久	台東区社会教育団体協議会理事長 台東区写真連盟理事長
8	教育委員会	梶 靖彦 (令和4年度)	教育委員会事務局次長
		三瓶 共洋 (令和5年度)	生涯学習推進担当部長